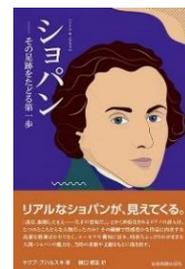




『ショパン—その足跡をたどる第一歩』

ヤクブ・プハルスキ (著) 関口時正 (訳)

全音楽譜出版社 2025.4



本書は「リトル・モノグラフ」と銘打ったショパンの伝記である。時系列順に並んだ細かいエピソードが彼を取り巻く人間関係や当時の世界情勢などと絡めて描かれ、作曲家ショパンの人物像が生身の人間として蘇ってくる。

ショパンは祖国ポーランドを後にしてウィーンに向かったが、当時のワルツ一辺倒に染まったウィーンでは受け入れられず、苦渋を味わった。十一月蜂起の報に、帰国して自分も参加するか思い悩む。家族に説得されウィーンに残ったショパンは、演奏会のチャンスを求めてサロンに出入りし社交生活に励んだが、本心は「サロンでは涼しい顔を装ってはいるが、家に戻ればピアノに向かってあたりちらしている」という極端な激情に揺さぶられていた。

その後に向かったパリでは、一転して一流サロンに出入りし上流階級への仲間入りを果たし、ポーランド亡命者として成功する。ショパンはサロンにおいて、リストやメンデルスゾーン、カルクブレンナーなどと交流し、職業音楽家として自立していく。

晩年、ショパンはジョルジュ・サンドと共に夏はノアンで過ごすようになるが、もともと病弱だった上、進行していた病が確実に彼を蝕む。本書では、臨終の様子を、臨場感あふれる形で描くことに成功しており、読者に彼の人間性を感じさせる。

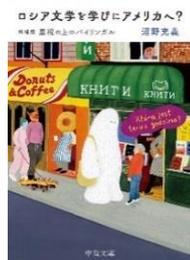
本書の特徴として、ただの伝記で終わらず、ショパンがピアノ音楽をどのように別次元に引き上げたのかということも詳述されている。例えば、ノクターンにおいて、その始祖であるジョン・フィールド(1782-1837)の作品にショパンがどのようなアイデアを加えたのか、また、練習曲というジャンルに与えた表現や技術的な書法が説明されている。

ショパンは練習曲やノクターンといった従来のジャンルだけでなく、バラードなど新しい音楽様式の作品も作曲したが、本書ではなぜ彼が新たな形式を必要としたのか深掘りしていて大変興味深い。

著者はショパンのバラードについて、ミツキューヴィチの詩作品との関連を否定し、バラード以前にショパンが作曲していた優雅な作品とは対照的に、より深みがあり、ロマン主義に源泉を辿ることができるとしている。さらに、ショパンはロマン主義をより広い意味で捉え、「靈感、幻想、出来事のみまぐるしい変化に従う自在な語り」を音楽のみで表現するために新たな形式を必要としていた。それはソナタ形式のような既成の型ではなく、語りに必要な分だけ自由に展開できる形式であった、と主張している。

作曲家としての活動を軸に、ショパンの私的なエピソードが散りばめられているのも本書の特色である。彼を支え続けたフォンタナとの微笑ましいやり取りや、婚約直前だったヴォジンスカとのエピソード、サンドと破局する原因の一つとなったサンドの娘、ソランジュについて書かれた手紙などから、ショパンという人間の多様性が浮かび上がってくる。

巻末には最新のショパンの研究史が掲載されており、ショパンについてより深く知りたい方には大変参考になるだろう。演奏家はもちろん、彼の音楽の愛好家にとっても、その作品の聞き方の幅を広げてくれる一冊である。(徳田貴子、ピアニスト、会員)



『ロシア文学を学びにアメリカへ？』

増補版 屋根の上のバイリンガル』

沼野 充義 (著)

中公文庫 2025.1, 白水社 1996.3, 筑摩書房 1988.4

大阪のJR鶴橋駅の商店街にある『カナリヤ』というカフェは、今も変わらず人気です。ここのチョコレートパフェは大きくてとても美味しいと、大学のクラスの女友だちが話していました。甘党だった私は「ぜひ!」と思い、友人たちと食べに行くことにしました。1990年代のことで、「食べログ」などによるインターネットからの情報などはありません。カフェに向かう電車内で、パフェはそれなりに大きくて、カフェのある鶴橋の

商店街はオシャレなのだろうとイメージしていました。

鶴橋に到着後、イメージは覆されました。まず、『カナリヤ』のパフェは60程ぐらいいあって、大きいのではなく巨大でした。次に、鶴橋駅の商店街は活気のあるコリアンタウンでした。商店街のアーケード内では定番のキムチやカクテキなどが量り売りされていて、色とりどりのチョコリがハンガーにかかっている、そして路地裏にはハングルで表示された焼き肉屋さんが並んでいました。大阪の中に

外国人コミュニティがあることを初めて知り、興奮してエリア内を歩き回ったのでした。

これがきっかけで、私は外国人コミュニティに関心を持つようになったのです。外国人コミュニティの基となるオリジナルの文化はどのようなものなのか。そのコミュニティはなぜ他国にできたのか。そして、そのコミュニティとオリジナルの文化はどう違うのか—そんなことを知りたくなりました。その翌年、大学2年生のときから、私はバックパッカーとなって海外をさまようのですが、行く先々で外国人コミュニティを探します。インド・コルカタ(当時はカルカッタ)のチャイナタウン、フィジー・スバにあるリトルインディアなどを訪れました。当時の私はコミュニティを探して到着することに精一杯で、大して学んでいなかったと思います。しかし、訪問を重ね地元の方々からの教えや書籍やインターネットで調べているうちに、私なりの探求学習が確立していったのです。

本書に惹かれた理由は、私の海外在住の始まりが沼野先生と似ている気がしたから、そして先生の探求心に大いに共感できるからです。

沼野先生は博士課程でロシア語・ロシア文学を専攻されていて、総仕上げに向けてソ連で学ぶ必要があると考えます。しかし、ソ連との交流が困難なこと、そして政治的な理由から研究テーマが限ら

れることから、アメリカで研究することを選択しました。アメリカにはソ連から亡命した学者や作家が多いからです。また、スラヴ・東欧諸国からの亡命者・移民がいることも好材料と思われたそうです。

私も英語を身に付けるためアメリカ留学を考えたのですが、費用が高いため、当時は廉価で英語を学べる準英語圏のマレーシアで働きながら学ぶことにしました。東南アジア諸国へのアクセスが良いことも選んだ理由のひとつでした。私は元々地歴科の教員で、ヒンズー教やイスラム教や仏教が融合する東南アジア文化に強い関心があります。

「アメリカの中のポーランド」「ワルシャワからシカゴへ」「英語は話せなくてもいい」の連続する3章は、特に素晴らしいです。ポーランド人街を確認するために、留学先のボストンからシカゴに向かう様子や、ポーランド人街を調査する様子などは、読んでいてワクワクします。シカゴに世界最大のポーランド人街があるとは知りませんでした! 興奮して、すぐにネットで確認しました。ぜひ訪れて、沼野先生のお考えや視点を参考にして、自分はどうに捉えられるかを確認したいです。

このように思っていたら、幸運にも、この2月にボストンへの出張があって、しかもシカゴ経由です。シカゴにあるポーランド人街に行き、ワルシャワとの違いを確認したいと思います。(齊藤賢人、会員)

『Домой—戦後 80 年・語り部 100 歳シベリア抑留者たちの声 ダモイの喜びと鎮魂の叫び—ろうそくの炎が消えるように亡くなった仲間へ』 シベリア抑留体験を語る会札幌* (編集/出版) 2025.10

大東亜戦争から 80 年、その 10 年前から抑留体験者の声を聴こうとして戦争の愚かしさを伝えてきたこの会の活動に驚かされた。戦後の間もない時には北方、南方を問わず捕虜としての抑留談はよく聞かれたのだが、体験者が高齢のため少なくなりその話への熱も冷めたころから、講演会を全国で開き資料を道内の高校、図書館へ送るなど、見事なものを感じる。

私も3年前から毎年8月の「シベリア抑留北海道慰霊祭」のお手伝いをするようになったが、改めてこの本のおかげで生々しい体験者の声に教えられることが多く、この活動にさらに不戦、平和を求める気持ちが強くなった。ありがたいことである。と同時にこの本の完成には大変な努力があっただろうと思う。本の内容は9名の**体験者の講演、会員の声、抑留の資料**である。後世のために貴重なものだ。

シベリア・モンゴルの抑留は酷寒・飢餓・重労働がよく知られている。しかし2千か所の収容所の在り様はそれぞれ違って、各人2年から4年半の体験談はより詳しく知らされる。ただ一様に語られるのは、この理不尽な運命を呪い、一日も早い帰

国を望み、戦争はしてはならぬものだと語っていることだ。現在はほとんどお亡くなりになっておられるが、まだお元気にシベリアに残されている遺骨の収集に国に熱心に働きかけている方もおられる。

この9名の語り部の中に、5年前まで活動していた「北海道自分史友の会」の会員さん2名を見つけた。私も会員だったので平成29年の総会の写真を見ると、そのお二人と共に撮ったものがある。そのころ、現在のように抑留に関心があればどんなに良かったかと思う。色々な話が聞けたことだろう。友の会で毎年発行された作品集を今読み返して、この記念誌とはまた別の話が出ていて、4年間の抑留の日々では語りつくせないことが多々あったのだら



* <https://www.facebook.com/profile.php?id=100064714747555>

うと思わされた。

収容所の環境、雰囲気も様々で、過酷なところと、まるで天国のようなところ、「こうした穏やかな環境が実現できたのは、ひとえに、その収容所のトップである大隊長の人間味にかかっていたと思います」という言葉は、組織を束ねる者の参考になる言葉である。

「体験を語る会」の会員さんの中にはロシアの方

もいて「この機関誌がかけがいのない平和のための資源となることを願っている」と寄せている。今もロシアとウクライナで同じことが繰り返されているのだと思うと胸が痛む。隣国のポーランドの方々もどんなに恐ろしさを感じているだろうか。ただ反戦、平和を唱えていても戦いの続く厳しい現実があることを忘れてはいけないと思う。（三田剛己、会員）

初めてのポーランド～文化と歴史に触れる旅 多原 良子

2025年5月上旬、ポーランド・ブロツワフで開催された文化交流イベント「さくら」に参加する機会を得た。この訪問は、2022年に札幌で「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』」を企画・プロデュースした元駐日ポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィッチ氏からの招待によって実現し、かねて抱いていた、いつかポーランドを訪れたいという念願が叶う初めての旅となった。

ブロツワフで講演



ピウスツキのポーランドへ

私にとってポーランドは、ブロニスワフ・ピウスツキの存在ゆえに特別である。彼はロシア皇帝暗殺未遂事件に連座して逮捕され、樺太へ流刑となった人物だが、強制労働後は模範囚として扱われ、サハリンで民族研究や子どもの教育に従事した。とりわけ、アイヌ語や歌を蝋管蓄音機で記録した功績は、今日に至るまで貴重な文化遺産とされている。また樺太アイヌの女性と結婚したことで知られ、その人生はアイヌ民族との深い関わりなしには語れない。加えて、歴史の中で大国の思惑に翻弄されてきたポーランドの歩みはアイヌ民族の経験と重なる面が多く、私自身の関心と共感を強めてきた。

以前、ポズナン大学に所蔵されていたピウスツキの蝋管を北海道大学へ移送し、日本の最新技術で再生を試みるプロジェクトのために来日されたマイエヴィチ氏と居酒屋で何度も議論を交わしたことがある。また、フランスを訪れた際、娘の配偶者の叔母が眠る墓地に偶然ピウスツキの墓碑を見つけ、深い縁を感じて言葉を失ったこともあった。

流刑後にポーランドへ戻った彼は不遇の晩年を送り、各地を転々とした末にパリで自死したと伝えられる。誠実で温かな人柄の彼が、なぜ苛烈な運命に巻き込まれたのか。その背景にあったであろう人道主義的精神と反体制的思潮への共鳴について、思いを巡らさずにはいられなかった。

ブロツワフで

ワルシャワからブロツワフまで列車で約三時間。窓外には緑と菜の花の黄色が広がり、心に描いていたポーランドそのものの田園風景が現れた。運河

に囲まれたブロツワフの街には東欧独特の文化と歴史が息づき、路面電車が静かに行き交っていた。

イベント会場は旧教会を改装した建築博物館で、私は「アイヌ女性の複合差別からの脱却」を題目に講演した。アイヌがたどってきた歴史の苦難や、現在も続く女性の課題について語ると、参加者から「差別と闘い続ける勇氣ある行動に深い敬意を表する」「連帯を惜しまない」といった言葉を頂いた。日本に先住民族がいることへの驚きが主な反応かと予想していたが、長い独立闘争を経験したポーランドの歴史が、他民族の苦難への共感を育てているのだと気づかされ、大きな感銘を受けた。



『祖霊祭』の朗読者たちと*



ブロツワフの植物園で

続いて、ヤドヴィガ氏、元舞台女優、古楽器奏者、私の四名で各民族の言語と音楽を織り交ぜた「シンヌラッパ・クンネニサツ(夜明け前の『祖霊祭』)」を上演した。共演者の朗読の力強さと深い表現力に、演じる私自身も引き込まれた。

その後ワルシャワで二日過ごし、ヤドヴィガ氏が副館長を務めるユゼフ・ピウスツキ博物館を案内して頂いた。ポーランド独立を導き初代国家元首となったユゼフの生涯を壮大に描く展示は圧巻だった。

今回の訪問は、文化的・歴史的縁が幾重にも重なり合う、私の人生において特筆すべき体験となった。関わってくださったすべての方々へ心より感謝を申し上げたい。(たはら・りょうこ、メノコモシ代表)